

特集：みなとまちづくりの新たな展開をさぐる大学調査



発行者：産官学連携会議「港区CRテーブル（港区、(一社)港まちづくり協議会大阪、大阪市立大学都市経営研究科小長谷研究室）」、「大正区CRテーブル（大正区、(一社)港まちづくり協議会大阪、大阪市立大学都市経営研究科小長谷研究室）」、
発行日：2022年2月28日 編集事務局：(一社)港まちづくり協議会大阪（大阪市港区築港3-7-15港振興ビル212 06-6572-0017）

港区からのまちづくりの挨拶

港区役所では、二〇二五年大阪関西万博の開催を契機とした活性化の取り組みの方向性を示した「港区エリア活性化プランを令和三年四月に策定し、地域活性化を図っています。その取組みの一つとして、「マイクromoビリティ」とともに、地域の持つ資源を活用して域内のみならず広域的に人の流れを呼び込み、マイクロツーリズムを推進と回遊性向上の観点から、隣接エリアにサイクルポートを設置するとともに新技術のサイクルを取り入れたシェアサイクルの実証実験を本年一〇月より実施し、サイクイベントを一月に開催しました。また、シェアサイクルを活用して、まちの魅力を再発見していただくため、「サイクルマップ」を作成し、情報発信を行いました。最後に、この度の大阪市立大学の授業参加は私にとって感慨深いものとなりました。指導教員の松本さんとは、私が交通局在籍時に天保山まつりの熱いプレゼンテーションを受けてからのお付き合いで、今年度の行政事業の受託者、政策アドバイザーであり、不思議なご縁を感じます。この授業が学生さん達の今後の活躍に繋がればと思います。



(港区役所総務課 杉中庸二) にぎわい創出担当係長

特集：みなとまちづくりの新たな展開をさぐる大学調査

7. 銭湯 (市川憲汰)



大阪メトロ中央線、朝潮橋駅近くの朝日湯のオーナーである近江隆司さんとお話を伺った。近江さんは御年78歳。それにも関わらず、浴場の掃除を自分の手でされている。また、口調もハキハキされていて、物凄いバイタリティの持ち主という印象を受けた。◆朝日湯は、朝潮橋周辺の下町の雰囲気にマッチした、昭和の佇まいだった。◆まず最初に伺ったのは、風呂屋の利用者層についてだ。私は休日の昼間に利用したが、中高年が多いという印象だ。近江さんによると、平日には仕事終わりの人たち、さらに夜間には若者の利用もあるそうだ。また、利用者の中には刺青の入った利用客がしばしば見受けられた。スーパー銭湯では刺青が入っていると利用を制限されることが多いが、ここではみんな受け入れられる。一見レトロでありながら、多様性が強調される現代社会にも適応しているのだ。実は近江会長、若かりし頃は欧米を放浪していたようで、そこでの経験が店のポリシーに活かされているのかも知れない。◆また、利用目的の移り変わりについても伺った。かつては各家庭に風呂がなかったことで、周辺住民の方々が生活の一部として風呂屋を訪れていた。時は移り、現代では殆ど家庭で風呂が備わっているため、生活必需品としての風呂屋の役割は消滅した。代わりに、日常にはない雰囲気をもつ味わう、一種のレジャーとして風呂屋は新たな役割を見出しつつあるそうだ。◆次に、風呂屋と地域コミュニティの関わりについて聞かせていただいた。風呂屋は昔から、地域の人々が互いに顔を合わせる場として機能してきた。そこで地域の輪が築かれることで、住民間の繋がりが深まり、地域に活気が生まれる。そして、地域の繋がりの中心である風呂屋にも活気が生まれる、という好循環が発生するそうだ。さらには、地域の輪は非常時に助け合いの輪となって人命を救うこととなる。風呂屋はまさに、地域コミュニティの原動力なのだ。◆最後に、実際に朝日湯の風呂に入って感じたことだが、予想以上に設備が充実している。広い休憩所に、サウナ、さらには電気風呂、漢方風呂、露天風呂などの多種多様な浴槽が設けられている。もちろんスーパー銭湯には設備面では負けるが、レトロで非常な雰囲気を体験しながらこの充実した設備、さらには流行語大賞に「調う」がノミネートされるほどのサウナブーム。もっと銭湯ファンは増えるのではないかと可能性を感じた。サイクリング×銭湯 案も念頭に置きながら、この可能性をもっと模索していきたい。

8. ものづくりからまちづくり (名越瑛美)



大阪港の発展とともに港の周辺には海運などの物流業が集積し、金属や機械を中心とする製造業が著しい発展を遂げました。そうした歴史から、港区には現在も、船舶や機械、金属関連の素晴らしい技術を誇るものづくり企業が集積しています。今回、港区でもものづくりの設計から制作まですべてを担う「インデックス」の代表上中さんにお話を伺いました。◆上中さんは大学で工学について学んだあと手に職をつけるため化学品メーカーチバガイギーに就職、その後自動車会社童夢に転職。しかし、社長の「やりたいことやる」風潮に触発され、自立。自分で納得するものを作るため、この会社を設立しました。モットーは「及第点を取らないと製品として販売しない」ことです。失敗を恐れず愛とパッションを持って日々ものづくりに取り組んでおられます。◆港に近い作業所はすべて上中さんの手作りで、温かみを感じられる素晴らしい場所です。もともと船の製造に関わりたかった上中さんは水辺の作業所を探しており、そこで見つけたのが港区でした。◆今はベンチャー企業との開発、受託生産、オリジナル製品の販売を行っています。上中さん曰く、「他人に作れるもので自分に作れるものはない。」そうです。ピザ窯や車などありとあらゆるものを受託生産しています。◆ものづくりで大切なこと、それは1対1によるものづくりだと言います。江戸時代のかんざし屋さんのように、その人の為にオンラインなものを作る、そんなものづくりを目指します。しかし、大量生産、大量消費、製造の自動化が進む現代に懸念を示します。ものづくりの自動化はコミュニティの衰退にもつながります。現代は生産者と消費者の顔が見えません。上中さんは人の心が通じ合うまちを作りたいとおっしゃいます。顔が見えるまちづくり、その第一歩として受託生産などを通してのコミュニティづくりにいそいでいます。◆例えば、水上自転車。ものづくりからコミュニティの広がりをめざす一般社団法人港まちづくり協議会大阪理事でもある上中さんは、水辺で人が集まれることはないかと考えました。「水辺を盛り上げたい。」こういった想いから水上自転車の制作に着手。ものづくりを通じて新たなコミュニティのきっかけになることを願います。◆ものづくりは人が行うものでそこには人間関係が必要です。本気でやりたい人、本当にもものづくりに愛がある人達とのコミュニティづくりが大切なのです。このコミュニティづくりがまちづくりにつながります。「ものづくり」は「人づくり」であり「まちづくり」でもあると感じました。



9. エコなまち (山本将慶)



八幡屋でイタリアンを運営する山崎さんは、良いものを良いと感じられる場所を港区につくるという活動を始めた。八幡屋公園は立地的に大阪港駅、朝潮橋駅、弁天町駅のあるためアクセスが良い場所であったため、その公園で活動することを決められた。活動を始めたとき、公園の入り口には何も無く無機質に感じられ、外から緑地が見えておらず、公園としてのイメージがかけられているという問題点があった。そこで、少しぬくもりを感じるこまごまの木で椅子を作り座ってもらうことで周りを暖めてもらうことや、地元のお店でご飯を買い公園で食べてもらうという流れができるのではないかと考え、まず最初にベンチを作成された。そのベンチは業者さんに頼んで作ってもらうのではなく、山崎さんと同じようにその土地に対して愛がある人達と協力して作り上げられた。2021年の6月にベンチを作成され、2022年には追加で2台作成される。◆まちづくりという点で考えると町に対しての愛やその土地の人へのリスペクトがなければ、その町を良くできないということを教わった。◆ただ単に流行に合わせた施設を用意することでまちづくりができるかと今まで考えてきたが、そうではないということが今回伺ったことで理解した。その町に合ったもの、その町の人に望まれているものを作る、そんな愛に溢れたまちづくりを考えていきたい。

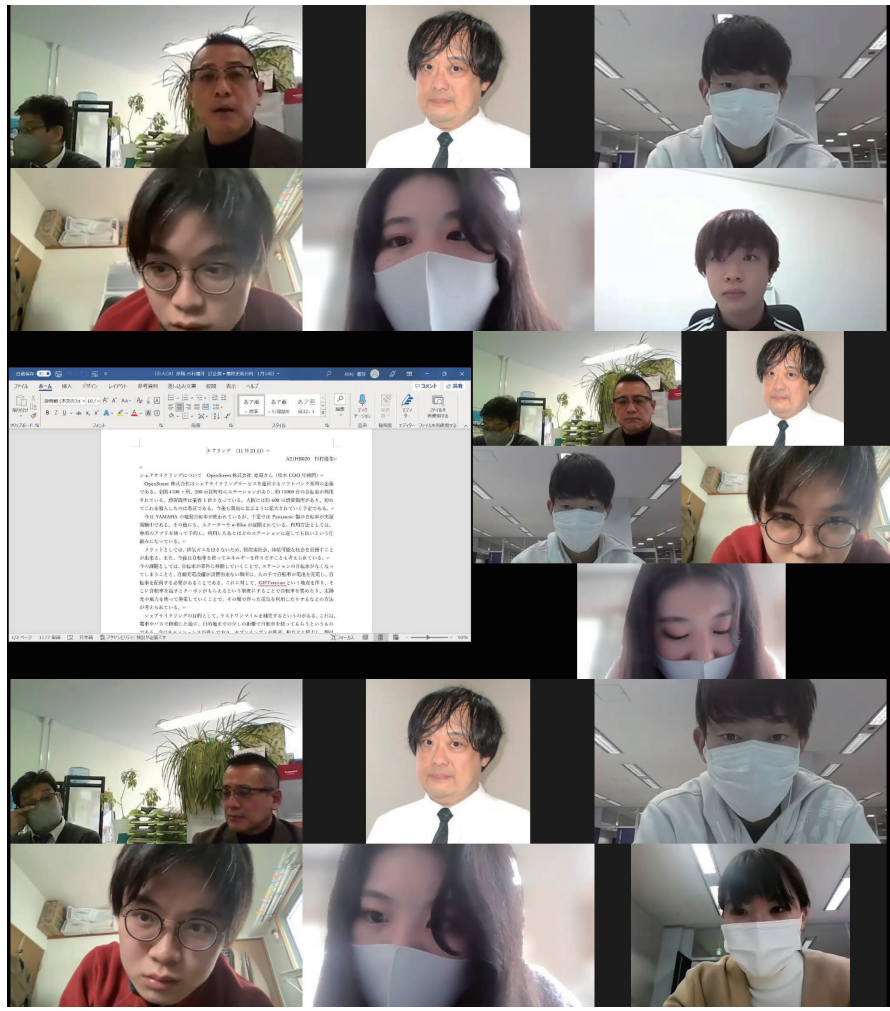


編集後記：港まちづくりタイムズ第8号は、未来志向で、これからの大阪ベイエリアのまちづくりの新しい手がかりについて、市大生による調査研究成果などについてご報告しました。
★本タイムズのバックナンバーは(一社)ホームページ <http://minatomachi-o.jp/> をご覧ください。
港まちづくりタイムズ第8号 発行者：産官学連携会議「港区CRテーブル（港区役所、(一社)港まちづくり協議会大阪、大阪市立大学都市経営研究科小長谷研究室）」、「大正区CRテーブル（大正区役所、(一社)港まちづくり協議会大阪、大阪市立大学大学院都市経営研究科小長谷研究室）」、発行日：2022年2月28日、編集事務局：(一社)港まちづくり協議会大阪



区、法人、大学の産官学連携会議 (CRテーブル) とフィールドワーク

本年度は年末以降コロナ感染症が拡大したため、例年の産官学連携会議は、始めて本格的なオンライン形式で開催されました。学生からは「大阪がクルーズ船を振興するにはどうするのか?」「まちの中の銭湯の役割や昭和レトロ感などをいかしたまちづくり」「シェアサイクルのラストワンマイル・自転車を返す拠点の課題解決や、IT産業との連携」「オンラインワンの顧客対応の設計やものづくりの大切さ」などに関し、研究発表をおこない、学生と行政担当者との活発な議論がおこなわれました。区からは、コロナ禍などの条件がながらも客船ターミナルの建て替え等による観光の活性化、万博における海に関する展示などのお話、木津市場におけるスーパー銭湯の設置など、シェアサイクルのルートとマップづくりやまちの再発見の話、港区と大正区の歴史、ものづくり実行委員会の話などの説明をしていただきました。その後、「アミューズメント施設や回遊の今後の予定」「サイクリング以外のスポーツの取組み」「オープンファクトリーやものづくり若者見学」などの自由討論をおこない、いろいろなアイデアを検討しました。フィールドワークも感染予防を徹底しおこないました。



特集：みなとまちづくりの新たな展開をさぐる大学調査

4. ジャズのまちづくり ジャズ船で演奏された吉川先生に聞く (安東拓海)

大阪とジャズとの関係について、11月14日のキャプテンラインの特別号(港まちづくり協議会大阪共同企画)のジャズクルーズで演奏されたプロのトラディショナル・ジャズクラリネット奏者吉川先生に聞いてわかったことを説明させていただきます。◆まず初めに吉川先生について紹介させていただきたいと思います。トラディショナルジャズ、とは1910年～1920年代にかけて多く演奏されていた音楽ジャンルの一つです。先生は大学生の軽音楽部でジャズに出会い、1970年に大学を卒業するとともに、大阪万博にてジャズミュージシャンとしてのキャリアを歩み出しました。◆大阪とジャズとの関わりについては、いまから100年前ごろに太平洋航路を通してジャズは横浜、そして大阪へやってきました。当時、ジャズはダンスの伴奏音楽として始まっています。大阪では道頓堀界隈でダンスホールやカフェでジャズが演奏されて、若い男女はジャズで踊るダンスに熱狂したといわれています。そして、大阪でジャズが発展した大きな要因となったのは大正12年9月1日に起こった関東大震災で、壊滅的な被害を受けた東京から大阪へ逃れてきた多くのミュージシャンが、新しい音楽のムーブメントとして、ジャズを取り入れ演奏を始めた事であると言われてます。同時にジャズの認知が高まり、ジャズで踊るダンスが商売になるということで、当時道頓堀界隈に多くのダンスホールができ、ダンサーやバンドマンがそこで仕事をすることになったことも、大阪でジャズが発展した要因です。そんな状況が当時作曲されたジャズ風の歌謡曲「道頓堀行進曲」にうたわれています。また、ダンスホールだけでなく松竹座などの歌劇や河合ダンスショーを作りジャズやタンゴやラテンなども演奏され道頓堀が大繁盛しています。



5. カフェ (松下洋)

カフェとカフェの繋がり 昨今、シェアサイクルを広めようという取り組みが各地で見られる。それに伴い港区、大正区、浪速区ではeバイクを用いた3区にまたがったサイクリングルートが町おこしの一環として考案されている。港3区の豊かな水の景観を楽しみながらサイクリングを楽しむというのは非常に気持ちの良い体験であろう。しかし、サイクリングの素人がわざわざサイクリングをしないと集客力があがるのではないかと考えた。そのひとつとしてカフェ巡りを提案する。◆カフェのひとつとして「GLION MUSEUM」を取材する機会を頂いた。GLION MUSEUMは1923年築の赤レンガ倉庫をコンバージョンして造られたクラシックカーミュージアムであり、2015年6月にGLION GROUPの30周年記念事業としてオープンされた。古い建造物をコンバージョンする際は外観を維持し、中は改装するという場合が多い。しかし、ここは安全性を確保しながらも当時の雰囲気を保ち、特別性を感じられるように外観をもちろんのこと、内装も当時のままで残している。また、GLION MUSEUMの近くには海遊館があるが、GLION MUSEUMは大人の場、海遊館は家族の場と良い意味で差別化ができています。サイクリングで巡るカフェは大人にベクトルを向けたもので良いのかもしれない。◆車に乗り、クラシックカーや赤レンガを觀賞し、良い車があれば買うこともできる。さらに、カフェで食事もでき、シェアサイクルで他とつながっている。ソムリエの中川さんに迎えられたのだが、出迎える笑顔が今でも印象に残っている。このことについて中川さんは「お出迎えはサービスの第一歩」だと話されていた。さらに、ラテアートなど客を楽しませる要素も盛り込まれていた。◆シェアサイクルでカフェとカフェをつなぐ際、各カフェが笑顔満点のお出迎えをし、客を楽しませることで人と人ともつなぐ、そのようなサイクリングルートを考えたいと思った。



6. シェアサイクル (杉村優芽)

シェアサイクリングについて、OpenStreet株式会社はシェアサイクリングサービスを運営するソフトバンク系列の企業である。全国4100ヶ所、200市区町村にステーションがあり、約1万5000台の自転車が利用されている。設置箇所は業界1位となっている。大阪には約600の設置箇所があり、初めてこれを導入したのは港区である。今後関東に並ぶように拡大されていく予定である。◆電動自転車が使われている。利用方法としては、専用のアプリを使って予約し、利用したあとはどのステーションに返しても良いという仕組みになっている。◆今の課題としては、自転車が郊外に移動していくことで、ステーションの自転車がなくなってしまうこと、自動充電設備が設置出来ない場所は、人の手で自転車の電池を充電し、自転車を配荷する必要があることである。これに対して、GIFFstationという地点を作り、そこに自転車を返すとクーポンがもらえるという制度にする事で自転車を集めたり、太陽光や風力を使って発電していくことで、その場で作った電気を利用したりするなどの方法が考えられている。◆シェアサイクリングの目的として、ラストワンマイルを補完するというのがある。これは、電車やバスで移動した後に、目的地までの少しの距離で自転車を使ってもらうというものである。今はキャッシュレスが進んでおり、セブンイレブンや鉄道、船などと協力を、割引などの特典を与えることで、シェアサイクリングが消費に繋がっていくようにしていく。また、自転車の位置情報がわかるようになっており、どこかのルートを通ったのか、どこに立ち寄ったのかなどのデータを集めることで、人工知能を使ってマーケティングができ、何を誰に売れば良いかわかるようになる。シェアサイクリングの利便性を向上させていくことで、継続して利用する人が増え、それに伴って増えた情報量を会社が活用することができ、さらに消費に繋がるように発展させていくことが重要である。私は、なぜシェアサイクリングを電気通信会社がするのか疑問だったが、人の流れをつかみ、様々な会社と連携していくことで消費に繋が、利益が産まれていくという仕組みを知って納得がいった。今後この事業が広がっていけば、日本の消費の在り方が変わるのではないかと感じた。



特集：みなとまちづくりの新たな展開をさぐる大学調査

1. スケートボード (A) 運営のしくみ (栗山大樹)

11月14日に大阪市港区で開催されたスケートボードイベントRiders Game大阪港は、主催：港区役所、企画運営：港まちづくり協議会大阪・間口ホールディングス(株)によって行われた。このイベントを通じて、運営協力の(株)Groofyは、2025年に開催される大阪・関西万博に向けて、大阪港に世界から注目されるような日本の「スケートボードの聖地」を創り、それと同時に「大阪港の地域創生」と「日本のスケートボード業界の発展」を目指している。今回のイベントでは(株)Groofyの代表取締役兼Webエンジニアである伊崎遼太郎氏と(株)Groofyの取締役兼動画クリエイターである岩澤史文氏にお話をうかがった。◆彼らが会社を設立したキッカケは、彼ら自身が元々スケートボーダーであったのだがその時に大阪、さらには日本全体でスケートボードを行うのが許可されている場所であるスケートパークがあまりないと感じ、誰もが環境に左右されずに平等にスケートボードを楽しめるような空間を創りたいというビジョンから生まれたのだという。またスケートボードの競技人口は世界全体で5000万人と言われており、若者を中心に圧倒的な人気を誇っているスポーツである。さらに、今年の東京オリンピックで初めて公式種目化されたこともあり今世界で特に注目を浴びているスポーツでもあるが、その一方で日本では、先ほども述べたように公共のスケートパークが少ないのでスケートボーダーの練習環境が圧倒的に不足しているということによるカルチャーとしての認知度の低さ、大阪港での少子高齢化とコロナ禍によるインバウンドの喪失が深刻な問題となっているというこの二つの現状から、住居が少ないので騒音問題を引き起こしにくくスケートパーク設立に適した環境が整っており、また大阪港の新たな集客コンテンツになり得るという背景から、様々な企業や自治体からの支援の下で今回のイベントRiders Game大阪港を開催するに至ったのだという。◆今後の事業展開としては、今回のプロジェクトからスケートボード×地域創生の成功モデルを確立させスケートボーダーの社会的地位の向上を目指し全国にスケートボードを楽しめる環境を整えるということ、大阪港に「スケートボードの聖地」を創るということ、Riders Gameを動画メディアを活用したコンテンツとし世界的に認知を広げるといったことを掲げている。



2. スケートボード (B) イベント当日21/11/14 (笹井翔稀)

今回はスケートボードの学生ベンチャー、株式会社Groofyさんが運営協力した「Riders Game」というイベントに参加させて頂きました。小学生から大学生という広い年齢層のプレーヤーが参加しており、ギャラリーは参加者の親御さんという印象がありました。そのほかにも、散歩途中の地域の方々たちも足を止めてイベントの様子を眺めていました。今回のイベントは、現在スケートボードにある「マナーの悪さ」というイメージを払拭するために「マナー啓発」をテーマに掲げ、最終目標である練習場の常設へ向けた試験的イベントという側面を持っています。◆今回のきっかけとなったのは大阪府SIOアクセラレータプログラムからイベントが行われた港区へプレゼンする場を設けさせてもらうことができ、スケートボードが抱える「騒音」や「練習環境が少ない」といった課題・ニーズと、港区が持つ「人口の減少による活気の減退」という課題・ニーズの利害が一致したことです。Groofy代表伊崎遼太郎さんによると、Groofyでは地域とのつながりを大事にしていきたいという風に話していらっしゃいました。スケートボードは、年齢関係なく、また自己表現が自由にできるという面を持ち、それを生かして地域に愛され、そして地域創生をしていける、そんな関係性を理想としています。



(多くの企業が支えている、10tトラック (マグチホールディングス)、フェンス)



3. クルーズ船 (中村天徳)

その旧港エリアが復興する一つの手段としてクルーズによる大阪の振興を提案したい。◆まず、クルーズが港町にもたらす恩恵について説明する。クルーズでは大規模なものであると、クルーズ一隻に乗員乗客合わせて5000人を超える人々が乗船している。5000人を乗せた船が港に来航すると、港では必ず消費活動が行われる。つまり、クルーズでヒトが集まることでモノが消費されるわけである。その結果、その港にはカネや情報が集まり、より発展していくのである。◆では、次に大阪の現状について説明する。コロナ禍という特殊な状況避けるためにここでは2018年のデータを引用するが、大阪港へのクルーズ船入港隻数は45隻(注1)である。これは同年の博多へのクルーズ船寄港隻数が279隻(注2)であるのと比べると圧倒的に少ない。このように大阪はクルーズ振興地としては他港に圧倒的な遅れをとっていることが分かる。◆それでは、大阪がクルーズ振興地として発展していないことの原因は何であるのか。みなとまちづくりマイスターとして国の会議にも参加しておられる松本英之氏によると、その原因は2つあるとのことである。1つは大阪の客船ターミナルが未だ充実していないことである。物流船と港を共有している影響もあり風景は殺風景で、他の客船ターミナルと比べても、商業施設や娯楽施設などは充実しているとは言えないのが現状だ。そして、もう1つの理由は営業が遅れているということである。つまり、大阪のPRが不十分であるということだ。大阪をクルーズ寄港地として候補に挙げてもらうにはPRが徹底しなければならない。以上、大阪港でクルーズをすることの意義を説明してきた。クルーズが港町にもたらす恩恵を大阪にもたらすことが出来れば、大阪は再び港町としての繁栄を取り戻すであろう。(注1) 松本英之『マーケティングを活用した港まち再生と観光開発第一2 ゴールデンルート瀬戸内「創造的内海」』106頁26-27行目より引用。(注2) 同書104頁表より引用。

港町大阪でのクルーズの意義 大阪は歴史的に港町として栄えてきた町である。大阪港はかつて北前船や菱垣廻船、樽廻船のターミナルであった。しかし、時代が下るにつれて、貨物の大型化などにより港機能は旧港から新港に移り、旧港は衰退の一途をたどっている。大阪にもそのような旧港があり、